**受難節第6主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年4月13日**

**「十分に食べる」**

**列王記上19章1～8節**

**19:1 アハブは、エリヤの行ったすべての事、預言者を剣で皆殺しにした次第をすべてイゼベルに告げた。**

 **19:2 イゼベルは、エリヤに使者を送ってこう言わせた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださるように。」**

 **19:3 それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、**

 **19:4 彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」**

 **19:5 彼はえにしだの木の下で横になって眠ってしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」**

 **19:6 見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶があったので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になった。**

 **19:7 主の御使いはもう一度戻って来てエリヤに触れ、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。**

 **19:8 エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。**

**使徒言行録27章27～44節**

**27:27 十四日目の夜になったとき、わたしたちはアドリア海を漂流していた。真夜中ごろ船員たちは、どこかの陸地に近づいているように感じた。**

 **27:28 そこで、水の深さを測ってみると、二十オルギィアあることが分かった。もう少し進んでまた測ってみると、十五オルギィアであった。**

 **27:29 船が暗礁に乗り上げることを恐れて、船員たちは船尾から錨を四つ投げ込み、夜の明けるのを待ちわびた。**

 **27:30 ところが、船員たちは船から逃げ出そうとし、船首から錨を降ろす振りをして小舟を海に降ろしたので、**

 **27:31 パウロは百人隊長と兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」と言った。**

 **27:32 そこで、兵士たちは綱を断ち切って、小舟を流れるにまかせた。**

 **27:33 夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。**

 **27:34 だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」**

 **27:35 こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。**

 **27:36 そこで、一同も元気づいて食事をした。**

 **27:37 船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった。**

 **27:38 十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。**

 **27:39 朝になって、どこの陸地であるか分からなかったが、砂浜のある入り江を見つけたので、できることなら、そこへ船を乗り入れようということになった。**

 **27:40 そこで、錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を解き、風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んだ。**

 **27:41 ところが、深みに挟まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波で壊れだした。**

 **27:42 兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計ったが、**

 **27:43 百人隊長はパウロを助けたいと思ったので、この計画を思いとどまらせた。そして、泳げる者がまず飛び込んで陸に上がり、**

 **27:44 残りの者は板切れや船の乗組員につかまって泳いで行くように命令した。このようにして、全員が無事に上陸した。**

1.

**今から31年前、大学を卒業して程なく私は日本基督教団名張教会の礼拝に出席しました。それまで一度もキリスト教会に行ったことがなかった私にとって初めての教会、しかも初めての礼拝に行くというのは非常に勇気のいることでした。非常に緊張した思いで礼拝堂に入ると皆さんが「よく来てくれたね」ととても暖かく迎えてくださいました。私は初めての場所にもかかわらず、なんだか帰るべきところに帰って来たような気持になりました。礼拝が終わって、それでもやはり緊張した思いでいたのですが、同世代の青年の方たちが私に声を掛けて下さり「よく来たね。この後青年会をするから残って。お昼カップ麺だけどいい？」と誘ってくれました。私は戸惑いながらも青年会に参加しました。当時の名張教会は古い日本家屋を改装したものでした。敷地内に倉があり、倉の2階が青年たちの部屋になっていました。そこで人数としては5～6人だったと思うのですが、そこでみんなであれこれ話しながらカップ麺を食べました。どんな話をしたのかはもう忘れてしまいましたが、一緒に食事をしたことでより自分が受け入れてもらえている、ここにいていいんだという安心感を持つことができました。もちろんカップ麺1個ではお腹はいっぱいになりませんが、心がいっぱいになって家に帰り、「また教会に行ってみたい」と思い、それからほぼ毎週日曜日の礼拝と、土曜日夜の青年会に通うようになりました。**

**同じ釜の飯を食うではないですが、青年会では一緒に食事をすることをとても大切にしていて、そこで普段はなかなかそこまではできない悩み話や恋の話など立ちいった話や信仰の深い話をして交わりが深められ、絆が深められたように思います。一緒に食事をして一緒に悩み、お互いが心をさらけ出してお互いが受け入れ合って、そして一緒に讃美をして祈って。そういった主を中心にした交わりだからこそ、名張教会の元青年達とは信仰の友としての繋がりが30年たった今も続いているのだと思います。**

**今日は教会の暦では棕櫚の主日です。今日から受難週に入りました。イエス様が十字架に掛かってくださり死んでくださったその最後の一週間を覚えて私たちはこの一週間を過ごすのです。そして、来週はイエス様のご復活をお祝いするイースター礼拝を共に守ります。共に感謝と喜びを持ってイースターを迎えたいと思います。**

**その棕櫚の主日に与えられました聖書の箇所は、先週に続いてエウラキロンという暴風に襲われて今にも沈没しそうな船に乗っているパウロたちの姿が描かれています。船員たちがありとあらゆる手立てをとってもなすすべもなく助かる望みが全く消え失せた時、パウロは立ちあがって「元気を出しなさい。喜びなさい。」と皆を励ますのです。パウロは何の根拠もない励ましをしているのではなく、「私は神を信じている。神の言葉は必ず実現すると信じている」その信仰によって励ますのでありました。**

**「こんなどうしようもない状況で馬鹿げたこと言うな」という人もあったのかもしれませんが、パウロに語られた神様の言葉が実現しようとし始めたのです。「わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずです。」14日目の夜、アドリア海を漂流していたところ、陸地が近づいているように感じたのです。水深20オルギィアからさらに15オルギィアへ。1オルギィアが約1.85メートルですので。約40メートルから30メートルへ。陸地が近づくと暗礁に乗り上げる心配があります。船員たちは錨を投げ込み、さらにはなんと錨を投げ込むふりをして小舟を降ろして逃げ出そうとしたのです。パウロはそれを見つけて阻止させました。**

**相変わらず嵐は続いていたのでしょう。船は陸地に近づいても助かる見込みはわからない。こんな危険な船はごめんだとばかりに船を見捨てて逃げ出そうとする船員、兵士たちは怒りを覚えていたでしょうし、ただでさえ危険な船で皆で一丸とならないといけないときに、なんとも険悪な雰囲気が流れていたのです。それもそのはず14日間飲まず食わずだったのです。イライラも募っていたでしょう。またもやパウロが皆に呼びかけます。**

**「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。**

 **だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」（33・34節）**

**パウロはこのように言ってから皆の前でパンを取って感謝の祈りをささげてから割いて食べ始めたのです。すると皆が元気になって食事をしたのです。276人が十分に食べてから穀物を捨てて船を軽くしたのです。そうしたところ、朝になって砂浜に進み、パウロの言葉の通り船は壊れましたが、誰一人命を失うものがなく「全員が無事に上陸した」のです。**

**この次の28章を読むとこの島が「マルタ島」であることがわかります。そして巻末の地図「９　パウロのローマへの旅」を見ますと、クレタ島の「良い港」からマルタ島まで点線で→が記されていて、これを見ますと順調に前に進んだように見えますが、実際にはどこをどうたどったのかもわからない荒れに荒れた大嵐の中を276人の乗った船が漂流したのです。私たち船の事故はよく見聞きします。タイタニック号もそうですし、最近だと知床の遊覧船も多くの犠牲者を出した悲しい事故でした。自然の猛威の中で人間の無力さを思い知らされます。そして、パウロのこの船旅を改めて思うと、よく一人の犠牲者も出さずにマルタ島にたどり着けたなと思うのです。**

**「元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。」（22節）皆を励ましたパウロの言葉が実現したのです。いやそれはパウロが信じてお委ねした神様の言葉が実現したのです。神様の御業がなされた。そうとしか言いようがありません。**

**では、船に乗っていた人たちはパウロ以外はなすすべなく絶望の淵にいて、何もしないでただ打ち上げられるのを待っていたのかというとそうではありません。船に乗っていたパウロも含めた276人はパウロの勧めによって一緒に食事をしたのです。**

**33節には「夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。」と書かれています。この文章とこの後の食事の呼びかけを読むと、空腹では生き延びられないので各自で食事を取るように勧めているようにも思えます。でも実際はそうではありません。33節を直訳すると「全ての者が食物を共に受けることを勧めた」なのです。全ての者、つまり船に乗っている276人が共に食事をする、一緒に食事をすることを勧めたのです。そのように進めてからパウロは皆の前でパンを取り神様に感謝の祈りをささげてパンを裂いて一人で食べ始めたのです。そうしたらパウロの食事をする様子を見た残りの275人は元気になってパウロと一緒に食事をしたのです。**

**パウロの呼びかけとパウロが感謝の祈りをささげて食事をする姿を見るまでは、14日間何も食べず何も飲むこともできなかった人たちです。船の沈没の恐怖、それは死の恐怖で食事が喉を通らなかったのです。おまけに船員たちはこの嵐の中我先に逃げ出そうとする。怒号も飛び交っていたでしょう。泣き叫ぶ人もいたかもしれません。凡そ平和とは程遠いこの船がパウロが一緒に食事をすることを勧めて感謝の祈りをささげて食事をする姿を見て皆が食事をして276人の食事会です。いわば嵐の中の大宴会です。相変わらず嵐は続いています。沈没の恐れもあるし、暗礁に乗り上げる恐れもあります。**

**現実は変わらないのです。しかし、船の上はそれまでとは打って変わって人々の笑顔が溢れ笑い声が溢れているのです。それまでにはできなかった会話もお互いにしているでしょう。踏み込んだ話もしているでしょう。どこからともなく祈る人、讃美をする人もいたと思うのです。この嵐の中の大宴会の中心にイエス様がおられるのです。主を中心とした豊かな交わりがここにあるのです。**

**そして、皆が十分に食べるのです。「十分に食べる」はお腹いっぱい食べるということです。お腹いっぱい心もいっぱいになって全てが満たされて、皆で協力して穀物を捨てたのです。食事の前までは決して一つになれなかった276人が共に食事をすることで全てが満たされて心一つにして穀物を捨てたのです。穀物を捨てるということは食べ物を捨てるということです。確実に上陸して助かる保証はないのに皆が全てを神様にお委ねして命を繋ぐのに大切な食べ物を海に捨てたのです。もう食べ物はありません。しかし、全てをお委ねしたこの船は軽くなったおかげで暗礁に乗り上げて座礁することなく無事にマルタ島にたどり着けたのです。神様が応えてくださった。だからこそ、神様の御言葉が実現したのです。**

**イエス様を中心とした嵐の中の大宴会、これって教会の姿ではないかと思います。ここに教会があると思うのです。感謝の祈りを唱えて、パンを裂いて共に食事をするのです。主の恵みを分かち合うのです。そして神様を信頼して全てをお委ねして歩むのです。**

**使徒言行録2：42以下にペンテコステに誕生した最初の教会の姿が記されています。**

**「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」**

**共に御言葉に聞き、共にパンを裂いて食事をし、祈り、讃美をするのです。互いに愛し合い、支え合い、助け合って教会はイエス様を中心とした交わりを持つのです。教会の中心にイエス様がおられて、教会は心を一つにして祈りを一つにして嵐という迫害の中で豊かな交わりを持つのです。そして何よりも教会は礼拝をするのです。共に主の御言葉に聞くのです。十字架と復活の福音の神の言葉を共に聴くのです。その御言葉の恵みを共に分かち合うのです。**

**そのような教会の姿が嵐の中の大宴会の中にあるのです。そしてここに教会の礼拝の姿があるのです。それは私たちの教会の礼拝の姿です。激しい嵐です。どうなるかわからない不安があります。けれども、嵐の中たとえ厳しい現実は変わらなくても、教会という船の中心はイエス様です。イエス様を中心とした交わりです。共に御言葉に聞いて、祈り、讃美をして十字架と復活の福音の恵みを分かち合うのです。皆で共に御言葉を十分に食べるのです。お腹いっぱい食べるのです。御言葉の恵み、聖餐の恵み、また愛餐会やお茶会などの主にある豊かな交わりの恵みによって、私たちはお腹も心も霊も満たされて、皆共に心を一つにして、愛し合って、助け合って、祈り合って、支え合って、主に全てをお委ねして嵐の中を歩んでいくのです。そこに主が豊かに働いて下さって、必ずどこかにたどり着くのです。**